

38 ゆめ なか
夢の中

場面：ラジオドラマ (SF)

状況：三人称視点のナレーションで進む物語。不思議な空間に閉じ込められた男

登場人物：A (男性、ナレーター)

A: 彼は明るくて広い空間の中にいた。その空間の中に、一つのドアがあるのを見つけた。ドアを開けてみると、簡単に開いた。中に入ると、また明るくて広い空間の中だった。辺りを見渡すが何も見えない。見渡しているうちに、今開けたドアは消えてしまった。

「ん？元にはもう戻れないのか？」と彼は思った。彼はもう一度、空間を見渡してみた。しかし、やはり何も見えない。ただ、どこまでも続く真っ白な空間が広がるばかりだ。彼は歩き始めた。一歩、また一歩。どこへ向かっているのかも分からず、ただ歩き続けた。どれくらいの時間がたったのだろう。数分か、それとも数時間か、あるいは数日か。彼には分からなかった。時間という概念も、ここには存在しないかのようにだった。

疲れは感じない。空腹もないし、喉も乾かない。ただ、何とも言えない不安だけが彼の心を支配していた。このまま、永遠にこの空間をさまよおうのだろうか。誰とも出会えず、何もない場所で、一人きりだった。

そのとき、遠くの方に、小さな黒い点が見えた。歩き続けると、それは少しずつ大きくなっていった。希望か、それとも新たな絶望か、どちらかはわからなかった。点に近づくにつれて、それがまた一つのドアであることに気づいた。しかし、今度のドアは、彼が最初に入ったドアとは全く違う。古くて、表面には複雑な模様がある、重そうなドアだった。彼はそのドアに手を伸ばした。